

安全への提言

|||||



日本のリスク教育とリスク受容

かた たに のり たか
片 谷 教 孝 †

安全工学会の皆様には、筆者はあまりなじみのない存在と思われますので、最初に若干の自己紹介をさせていただきます。今期から理事を拝命いたしました、桜美林大学の片谷と申します。現会長の新井充先生と同じ研究室の1年後輩で、吉田忠雄先生と田村昌三先生の門下ではあるのですが、学生時代からの専門は大気汚染で、その延長線上で環境リスクに関する仕事に長く携わってきました。また自然災害にも阪神淡路大震災以前から関わっており、その意味では安全に関する仕事の経歴は長いのですが、産業安全の分野はあまり深く関わったことがありません。

そこで今回は、環境リスクや自然災害リスクの観点から、リスク教育やリスク受容に関連して昨今の世の中の動きから感じている点について、述べてみたいと思います。産業安全を専門とされる皆様には、違和感を抱かれる内容もあるかもしれませんが、しばしお付き合いいただければ幸いです。

筆者は前任校（山梨大学）と現在の勤務校において、環境リスク論という講義を20年近く担当しています。この講義の中で、学生たちに対して最も強調しているのは、リスクはゼロにならないという点です。この科目では、リスク要因である危険物、有害物質、放射性物質などの話もしますし、リスクアセスメント、リスクマネジメント、リスクコミュニケーションの話もしますが、文系の学生のほうが多いので、化学的な話は初歩的なレベルに抑えざるを得ません。抑えてもなかなか理解度は上がらないので、ともかくリスクはゼロにならないことと、減らすことはできるのでその努力が必要なことだけは、理解させるように努めています。極論すれば、履修者がリスクはゼロにならないことを理解し、頭の中にとどめてくれることが、この講義の存在価値であると考えています。学生たちの反応をみると、リスクはゼロにならないことがよく理解できたというようなコメントが多くみられるので、それなりに効果は上がっているようです。

筆者は現在の日本において、こういうリスク教育が

遅れていることが、多くの社会的な混乱の原因になっていると考えています。さまざまな局面で、いわゆる「ゼロリスク要求」が出てきています。廃棄物処分場の反対運動における例は、過去に数限りなくともいってもよいほど多くみられますし、近年では福島第一原発事故に関連する放射性物質の問題に関する議論でも、しばしばリスクをゼロにせよという声が聞かれます。そして直近の典型例が、豊洲市場移転問題です。地下にたまった水から化学物質が検出されたというだけで、それがどのような人体影響を与えうるのかには全くふれず、まるで勝ち誇るかのように記者会見をする某政党の議員団の姿を見て、筆者は強い危機感を覚えました。リスク教育がこれほどまでに遅れている日本では、今後も何かにつけ、こういう混乱が発生し、拡大していこうという危機感です。

長くリスクの問題に携わってきた立場から、これは放置できない問題なので、リスク教育の拡大強化は、喫緊の課題として取り組まなければならないと考えています。福島第一原発事故の例で、放射線による人体リスクがそれほど大きくないことを説明した放射線医学の人たちの多くが、「御用学者」として批判の対象になった例もあり、道のりが遠いことは事実ですが、一歩ずつ進めていかなければならない課題といえます。

一方で、日本人にはリスクを受け入れる文化も確実にあります。私が講義でしばしば引用しているのは、自動車によるリスクです。近年減ってきたとはいえ、現在も国内で年間4000人近くが自動車事故で命を落としています。この人数は、日本人が環境中の化学物質に起因するがんによって命を落とす数よりも多いと見積もられていますが、リスクをゼロにするために自動車を全面的に禁止せよという意見は、聞いたことがありません。すなわち、自動車によるリスクを日本人は受け入れているのです。こういうリスク受容の例は、飲酒、喫煙などにもあてはまり、決して特殊な例ではありません。

リスク教育の充実によって、リスク受容の概念を多くの国民が理解できるようになれば、昨今の社会的混乱は、かなり軽減できると筆者は考えています。

† 桜美林大学リベラルアーツ学群化学専攻：〒194-0294
東京都町田市常盤町3758
E-mail: katatani@obirin.ac.jp